2009年（平成21年）
第15号
（3月15日）

平安月報

The HEIAN monthly report

発　行　所：立正佼成会　京都教会
発行責任者：渉外部長　宮地啓安
〒605-0041　京都市東山区三条蹴上
TEL (075)762-2211　FAX (075)762-2266

京都教会５０年の歩み（２回目）

５０周年を迎えた京都教会のこれまでの歩みを紹介します。

■京都支部（現・京都教会）の発足前夜

昭和３２年右京区太秦に当時の会員が待ちに待った「京都連絡所」が発足した。その当時、第三十九支部の京都所属会員数は６４６世帯、神戸支部の京都組は２４４世帯だった。その翌年には両支部合わせて２２１５世帯と、着実に救いの輪が広がっていった。

当時は貧・病・争と言われる現実的な切羽詰った苦に対する切実な救われを求められた時代だった。その救いのため、煩悩の破折や根性たたきと言われる厳しい修行を通して、人さまの幸せのために功徳を積み、自らの心を正すという厳しい修行を繰り返した。

昭和３３年正月、教団は今までの「方便の時代」から「真実顕現の時代」へと進展した。これまでの導きの親子関係で結ばれた系列組織から、地域社会に根ざそうとする全国教区制布教体制に移行していった。その中で会長先生（開祖さま）は全国へのご巡教を行われ、京都の岡崎公会堂に京都在住の会員が一同に集まり会長先生より、「釈尊に帰れ」という演題でご法話をいただいた。

■初代・諸井教会長を迎える

昭和３４年８月、京都の会員は一時的に神戸支部に統括されたが、同年１２月には、いよいよ待望の「京都支部（京都教会）」発足のお手配をいただくことになった。そして、初代教会長（当時支部長）に故・諸井角治が就任した。ここに、京都教会の５０年の歴史が始まった。

諸井教会長は甲府道場長、第六十七支部長を歴任してこられ、京都に赴任されて幹部の育成に力を入れられた。人の心を機微につかみ、み仏の深い慈悲に基づく巧みな指導をした人だった。諸井教会長の厳愛（げんない）二道とも言える指導を通して、後の教団の幹部となった人々を輩出していった。

この昭和３０年代は日本が高度経済成長による急速な発展が見られた時代だった。とはいえ、一般市民はまだまだ貧しさの中にある昭和３５年１１月、南区唐橋大宮尻町に京都教会（旧京都教会）建設のお手配が下った。会員たちが建設工事の奉仕作業を行い、明けて昭和３６年１月に地鎮祭を迎えることとなった。

一食を捧げる運動

◆立正佼成会近畿ブロック
「第３回カンボジア平和使節団」

今年３回目となる近畿ブロックにおける「カンボジア平和使節団」の一行が２月５日～９日、現地を訪れた。団員は主に２０代～３０代の青年で大学生から社会人、さらには２回目の参加となる青年もいた。

一行は、一食ユニセフ募金の指定事業が行われている小学校を視察し子供たちと遊びやレクレーションなどで交流を図ったほか、毎年訪問している日本人女性が運営するスナーダイクマエ孤児院を訪問し、子供たち、スタッフと交流を深めた。

さらに、ポル・ポト政権下で大量虐殺が行われたキリングフィールドと呼ばれる刑場跡を訪れ、慰霊供養、平和への決意を確認したあと、トゥルースレン博物館で悲惨な歴史の一端を学んだ。

この「カンボジア平和使節団」は毎年開催され、現地を視察するだけでなく、子供や現地の方と交流することで、真の平和とは何か、真の豊かさとは何かを日本を離れ、団員同士で研鑽できる事業の一つだ。

時事刻々

邦画「おくりびと」がアカデミー外国語映画大賞を受賞した。死者に対する心配りを通して、生命の大切さ、人としての生きざまを伝えた名作だ。

受賞を機に映画館は連日超満員。ロケ地の山形には観光客が押しかけているという。まさに「おくりびと」効果だ。

この受賞について、米国では癒しを感じさせるという評価だ。多くの戦争犠牲者を出しているイラク戦争に疑問感じる人が増えていて、そのことが今回の背景にあると伝えられている。

英語では、Departuresと訳され、出発を意味するという。死を大切にすることで、生きることの意味を見出そうとする彼らの気持ちが表れている。

今月は、彼岸の月。命の根源は、先祖にある。先祖を大切にするから、今の私たちの存在がある。その先祖に手を合わす日本の心を大切にしたいもなだ。

２００９年京都教会は発足５０周年を迎えます。私たちは『多くの方との“絆”をより深めよう』をテーマに修行精進します。

諸宗教対話　～開祖の願いをこの京都の地に～

宗教協力

京都での青年層による宗教協力を目指しこれからどうして行こうかと考えていますが、最近とあるきっかけで思わぬ方と酒席を共にさせて頂く機会を得ました。夜回り先生で有名な『水谷修』先生です。高校の教員時代より生活指導の担当をされ、生徒の更正と非行防止･薬物汚染の拡大予防の為に積極的に活動され、「夜回り」と呼ばれる繁華街のパトロールを通して多くの若者と触れ合い、非行防止に取り組まれている先生です。某所での講演を終わられ、お一人で休憩のために立ち寄られたお寿司屋さんで偶然に出会わせて頂いたのです。現代社会の事、家庭生活の事、子供たちのこと、短い時間ではありましたが、多くのことを教えて頂きました。「命あるかぎりいっぱいいっぱいの想いを子供たちのそばに置きたい」とおっしゃられた先生のお姿がとても印象的でした。また先生は京都にも子供たちの更正を目的とした施設を設けておられます。そして先生は「京都もたくさんの子どもたちが苦しんでいますよ」と。

先生から佼成会でも何回も講演して頂き、また次代会長の庭野光祥とも親しくして頂き、私たち宗教者の役割に大いに期待して頂いております。京都の宗教者としてまず地域社会において何が出来るか？一教団の問題ではなく様々な教義を超えたところで意見を交わしながら、共に行動を起こしたいと強く感じました。

そのための第一歩として、共に行動を起こしてくれる有志を募って行く。ますはそこから始めよう。

私のほのぼの日記（京都佼成議員懇話会に参加いただいている議員さん方のコーナーです）

子供は宝だ！

京都府議会　山本　　正

今日の子供を取り巻く情勢は、子供が加害者・被害者になる事件が発生しております。このような悲惨な事案をマスコミで知る限り、信じられないものが多くなっています。

このことは、子供の問題であると同時に、大人社会そのものが反映されていると思います。昔、モノがない時代は、親が食べなくても子供に食べさせたと聞いております。しかし、子供を虐待し、子供に食べさせないということが、現実に起きています。親の役割は、命の大切さを教えていくことだと思いますが、私にはどうしても理解することができません。

育児への不安などの環境も十分考えていくとともに、社会や家庭のあり方など、私たちは今一度立ち止まって考えていくべきではないでしょうか。そのために、私も微力ながら頑張ってまいります。

ウトロ問題に取り組んで

宇治市議会　西川　博司

私は、ウトロ地域がある宇治市伊勢田町で生まれ育ったため、この地域に多くの友人がいます。「この人達が困っているのを見過ごすわけにはいかない」と、ウトロを守る活動に参加し、議員になってからは、議会の一般質問などでこの問題を取り上げてきました。

長いウトロ住民の闘いが展開されましたが、一昨年末にようやく「ウトロ住民で設立した法人が土地の東側半分を地権者から一括購入し、これを受けて国、京都府、宇治市が住環境改善に取り組む」ことになりました。まだ、解決に向けて多くの課題に取り組んでいかなければなりませんが、ひとまずウトロ住民は「強制立ち退き」の悪夢から開放されました。ここにこの紙面をお借りして、ご支援・ご協力いただきました韓国及び日本国内、そして全世界の支援者の皆さんに感謝申し上げさせていただきます。

他教団活動紹介（文化時報２月２１日より）

●おてつぎ運動を新展開　総本山知恩院

総本山知恩院の教化活動の中心を担う、おてつぎ運動の本年度重点施策が１２日の代議員会で発表され、創意工夫を凝らした新方針が示された。「日帰り奉仕団」の設定、「法話・写経・別時会・清掃奉仕」から選択し実践内容を深めるほか新企画も多数。

正住職寺院5,600ヵ寺中､3,800ヵ寺が加盟し徐々に一宗化への道を着実に歩んでいる。

京都教会　あの日あの時

昭和３３年３月

開祖さまの全国布教で岡崎公会堂にご来道頂いた際の写真（１頁参照）。京都の会員は信仰心の高揚と共に会員同士の結束とふれあいを深めることが出来、大いに心強いものとなりました。

５０年前（１９５９年）の出来事：４月に双子歌手であるザ・ピーナッツが「可愛い花」でレコード・デビューしました。

教育者教育研究所「創設４０周年記念大会」開催

「教育者教育研究所　創設４０周年記念大会」が２月８日、『真の教育者をめざして　今、いのち輝くとき～心の教育のこれから～』をテーマに普門館（東京・杉並）で開催されました。

教育者教育研究所は昭和４３年、教師自身の人間性の向上と仏教真理に基づいた教育の実現を目指し、庭野日敬開祖の提唱により創設されました。

同研究所は、教師自身の人格向上にこそ至高の教育の原点があると考えます。そこで、仏教の教主釈尊を人間の理想像、教師の理想像とし、人類善導の普遍的な教えを実践されたその実行の言行録としての『法華経』を人格陶冶の修養の中心に位置付け、人格完成を目指した真の人間教育を行います。これまで、全国の教育関係者を対象とした学習会をはじめ、各支所や地域ごとのブロックによる研究会や教育相談活動などを通し、さまざまな教育問題に取り組んでいます。

京都にも支所が置かれ、会員だけでなく、会員でない教育者も加わり、定期的に研究会を実施し、教えに基づき自己の成長に向けて取り組んでいます。

仏教を生活に生かす　「日常生活の中の仏さまの教え」

《すべてを生かす‥‥自覚》

庭野開祖は、困難な問題にぶつかると**「これはますます面白くなってきたぞ」**と、やる気が湧いてきたそうです。辛い出来事や人間関係に苦しむとき、私たちはつい「自分の何が悪かったのだろう。なぜこんな思いをしなければならないのだろう」と考えてしまいます。すべては、仏さまが私たちを幸せに生かして下さるためのはからいだと知っているはずなのに、です。

もちろん、ものごとには必ずそうなるための理由があります。けれども、***仏さまと私たちでは、問題を見る観点が違います。***つまり、仏さまの見方と私たちの見方は、一見ほんの少しの違いですが、その少しの違いで、見えてくる世界、展開する世界は全く違ってしまうのです。辛い出来事や、嫌な人に出会ったとき、その原因を見つめて自分を反省し、変えていこうとするのは大切なことです。けれども、それは時間もかかるし、喜びや生きていく力にはなりにくいものです。

「法華経では、自分と正反対の者を善知識だ、最も大事な友だちだと言っている。その見方が発想の転換というんですよ。それがみんな味方だという見方をして、みんなを生かしていこうというのが仏さまなんです。悪人も善人もみんな幸せにしなくちゃならないわけでしょ。その考え方が法華経の偉大さですよ」

借金の保証人になったばかりに、返済できなくなった知人に代わって、自分が借金を背負い込んでしまった男性がいました。《自分にも責任があるのだからと思って頭を下げて回っているけれど、この先いったいどうしたらいいのか》と悩んでいました。それが、庭野開祖のひと言で、気持ちがガラリと転換しました。

「あなたはいいことをさせてもらったんだ。功徳を積ませてもらって有り難いと思えばいい。たとえ借金のためであっても、人さまに頭を下げるのは、相手を尊び、仏性を礼拝する菩薩の行いなんだよ。だからその借金は、仏さまになるためのご縁だと思って安心していればいい」

屈辱としか思えなかったことも、それが仏道を歩んでいることなのだと心を転換できたとき、その男性は頭を下げること自体に価値を見出すことができました。すると、これまで苦であったことが、そのままで**〝私が仏になるための修行ならば、喜んでできる〟**と、思えたのでした。自分は人に頭を下げることが足りないから、そのマイナスを補うために頭を下げる修行をするのだ、と思ってはもったいないのです。すべてを生かそうという仏さまの眼で見ると、それは菩薩行という目的に導くためだったのです。

仏さまの世界の見方とは、***問題が起きた理由を見るのではなく目的として見ることなのです。***今、こうして生かされて生きている自分というものの価値を自覚し、その価値に恥じることのないよう、精いっぱい生きていきたいものです。いま行っていることの本当の価値を自覚しさえすれば、今まで「苦」だと思っていた問題も、幸せになるために必要な課題であり、仏さまのはからいに変わります。私たちは幸せになるために生まれてきました。

仏性(仏と同じ性質)という、幸せになる切符を持って生まれてきたのです。仏さまと同じ心を持つ私たちが、それを自覚して発揮する。そして、あたたかい心を通い合わせる。そのためにいろいろな人と出会い、いろいろなことが起こるのです。いま、ここに生かされている自分の価値を自覚することができたとき、私たちは本当の幸せに気づき、幸せを味わうことができます。そして、豊かで前向きな生き方ができるようになるのです。

庭野開祖の宗教観・平和観　「一乗の道」

《ベトナムの悲しみ》

第一回世界宗教者平和会議は歴史に残る「京都宣言」を採択し閉会した。その二ヵ月後、庭野開祖は京都会議の同志らとともに、まだ戦火のおさまらぬベトナムに向かって出発した。京都会議での「ベトナム戦争即時停戦決議」にもとづく、具体的な行動の第一歩としての「日宗連ベトナム視察団」の一行だった。サイゴン(現ホーチミン)に降り立ったのは、夜の九時を過ぎていた。チェン・ミン師を囲んで百人もの青年たちが、一行の到着を待っていてくれた。

この視察団のスケジュールは、仏教を中心とする各宗教の指導者や大学教授、政治指導者との意見交換、一般の民衆とのふれあいを中心に組まれていた。まさに夜を日に継ぐ強行日程だった。視察団一行と接触し、北ベトナムとの国境近くの村まで案内してくれるのは、平和のために努力する僧侶方で、南ベトナム政府から見れば好ましからざる人物だった。当然、視察団の行動に対しても、政府は「あれはいけない」「これもいけない」と、きびしい注文をつけてくる。ベトナム滞在中の庭野開祖の日記には「十二月二十日。日曜日。晴れ。この日も、中央政府が我々に圧迫を加える」と書かれている。ふだん口にすることのない言葉を記しているのは、よほど政府のいやがらせに腹をたてていたのだろう。

一行は、チェン・ミン師の案内でベトナムを南北に二分している十七度線に近い村まで入った。地雷原を避けながら、隣村はもう解放戦線の支配下だという地点まで進み、疲弊しきっている村人たち一人ひとりに、日本から運んだ援助物資を直接、手渡した。何度も激戦が繰り返された地で、時々砲声がとどろき、砲撃の跡が生々しく残っている。その戦火のベトナムの現実を目の前にして、***庭野開祖は世界の大国の間にはさまれて親子・兄弟が敵味方に分かれて殺し合いをしなければならないアジアの悲劇に、じかにふれたのであった。***

一方、このベトナム視察でいちばん心を励まされたのは、ベトナムの人びとの心に信仰が生きていることだった。アンクアン寺派のお寺は民衆の支持を得ていて、多くの信者が集まって、一行を待ちかねていた。その人たちに、庭野開祖は呼びかけた。**「私たちは世界宗教者平和会議を代表して、ベトナムにまいりました。ベトナムの平和のために宗教者が一致して働きかけようとする努力が、世界中の宗教者の団結によって進められています。日本の私たちも、かつては戦争で家を焼かれ、親子・兄弟を失う苦しみをなめ尽くしました。ベトナムのみなさんの幸福も、まず戦争に終止符を打って平和な国土を取り戻すことが前提です。そのために全宗教者が心をひとつにして立ち上がってほしいのです」**寺院の庭に集まった人たちは、雨に打たれながら身じろぎもせず見つめ、ひと言ひと言に聞き入る。

統一仏教会がひらいている孤児院に収容されているのは、すべて戦災孤児だった。南ベトナムには五十万人にものぼる戦災孤児がいるという。そのうち施設に収容されている孤児は一万五千人で、残された四十八万余の孤児たちは、物乞いをするか餓死するしかないという。日本から携えていった援助物資を子供たちに手渡すと、つぶらな瞳で見上げてニッコリ笑う。

帰路、難民キャンプに立ち寄った。四本の柱にトタン板を乗せただけの小屋の地べたに、洗面具、なべ、衣類の包みを並べて、家族がぺったりと座り込んでいる。着の身着のまま、わずかな身の回りの物を持って逃げるのがやっとだったのだろう。赤ん坊を抱きしめる母親、深いしわが刻まれたおばあちゃん、子供たちは裸に近い格好をしている。

どの家族にも父親の姿がない。父親は政府軍に取られ、息子は解放戦線に取られて、父と子が敵味方に分かれて戦っていることもあるという。フランスとの独立戦争を含めて二十五年もの戦争で、ベトナムをはじめインドシナの民衆の三十五人に一人が死亡し、十五人に一人が負傷したと伝えられているが、そのなかに、***父と子、兄と弟が敵味方に分かれて戦っていた人たちが、どれだけいただろうか。***　（つづく）

渉外部からのメッセージ

２月２１、２２日に全国車いす駅伝競走大会が京都で行われました。この大会を支えているボランティア団体の１つが「ユース２１京都」であることはご存知の方も多いと思います。今大会で２０年目を迎え、ボランティア創設のメンバーもすっかり「ユース」ではなくなっているようでした。しかし特に印象的だったのが親から子へのボランティア活動の継承です。創設メンバーのお子さんがボランティアに参加されていました。きっと親の後ろ姿を見ていたのでしょう。青少年育成の一端を見させて頂いたように感じました。

この月報を読まれて感想などがありましたらお気軽にお寄せ下さい。　RKK 京都教会　FAX 075-762-2266